

「安心」を生む親孝行



私たちにとって、親は非常に大きな存在です。自分にいのちを与え、養い育ててくれた親からは、自分自身が成長し、自立してからも、人生を歩んでいくうえで大きな影響を受けることになるでしょう。

『論語』には、こうも書かれています。

子曰く、父母の年は知らざるべからざるなり。

一はすなわち以て喜び、一はすなわち以て懼ると。

(里仁篇)

これは、孔子が年若い弟子たちに向けて語った言葉で、「子として、父母の年齢は知っていなければならぬ。それは、この年になってもまだ達者でいらつやめるのが、その長寿を喜ぶためであり、もう一方では、この先の心配をするためだ」ということです。そこには、若くして親を失った孔子の「君たちは父母が生きているというだけで、たいそう幸せなのだ」という思いも表れているように思えます。

今回は、年寄いた親を支える家族の心づかいについて考えます。



お父さんが入院？ そのとき兄弟は……



東京近郊に住む会社員の坂井俊和さん（43歳）は、結婚して十年。現在は二児の父親となり、自身が生まれ育った実家の近くに住んでいます。実家では、七十年代になった両親が二人で暮らしており、俊和さん一家との行き来も多く、和やかな日々を送っていました。

ところが一年前、それまで病気一つしなかったのなかつたお父さん（75歳）が突然、病に倒れました。俊和さん夫妻は、入院中のお父さんやそのお世話をするお母さん（73歳）のことを、何かと気づかつ

ていました。それが最近になってお母さんも体調を崩し、病院にかかるようになったのです。

俊和さんも、いずれはこんな日が来ることは想像していました。妻の陽子さん（39歳）も手助けをしてくれるのですが、六歳と八歳の子供を抱え、また、家計を助けるために近くの工務店で事務のパートもしていて、なかなか思うようには時間が取れません。そこへお母さんに代わって入院中のお父さんのお世話をしたり、お母さんの通院に付き添ったりもするようになり、俊和さん夫妻はとても忙しくなってきました。

俊和さんには、三つ年上のお兄さんがいます。お兄さんは仕事の都合もあつて、奥さんの実家の近くに家を構えまし



た。俊和さんたちが住む町からは、車で二時間半ほどかかる場所です。そんな事情もあつて、俊和さん夫妻は両親の近くに住むことにしたのですが、慌しい生



活の中で、次第にお兄さんのことが腹立たしく思えてきました。

結婚以来、お兄さんが実家の両親を訪問するのは、三か月に一度ぐらい。お父さんの入院後、見舞いに訪れる回数は多少増えたものの、そのほかは俊和さんに電話をかけてきて「親父は今、どんな様子だ？ おふくろはどうしている？」と、尋ねる程度です。

当初は「兄さんは遠いところにいるし、自分たち夫婦で両親を支えなければ」と思っていた俊和さんも、やがて「結局、兄さんは親のことを弟の自分に押しつけているだけじゃないか。もっと実家に来て、こちらがどんな様子なのかをしつかり見てほしいよ」などと、妻の陽子さんに愚痴をこぼすことが多くなりました。

俊和さんのいらだち



そんなある晩のことです。

「明日はまた、出勤前に病院に下着を届けるのか……」と、つぶやく俊和さん。

「そうね。私が行ければよかつたんだけど」と、陽子さんは少々申し訳なさそうな表情です。

「それにしても、兄さんは親父のことをどう考えているんだろうな。こちらがこんなに大変な思いをしているのに」

「あちらはあちらで、事情があるのよ。お義姉さんのお父さんは、足を悪くされているみたいだし……」

「こつちのほうがもつと大変じゃないか。

それに兄さんは『おまえたちには悪いが、頼むよ』という、そんなひと言もないだろう」

「そうね。でも、あなただつて同じじゃないの？ 初めのころは私にも『大変だろう、悪いね。ありがとう』なんて、よく言ってくれたけれど、このごろは何も言ってくれないでしよう」

「それは、おまえとは一緒に頑張っている同志みたいな気であるからさ。だけど、兄さんは親父やおふくろの様子を尋ねてきても、なんだか他人事みたいな感じがして……」

俊和さんは実のところ、こんなふうにお兄さんを悪く言ってしまう自分自身にも、嫌気がさしているのです。

俊和さんは前々から、年老いた両親に孝養を尽くしたいと思っていました。しかし、こうした状況に直面してみると、多くの面で妻の陽子さんに頼らざるをえず、自分一人では十分なお世話ができないことも事実です。入院中のお父さんの顔を見れば「あんなに元気だった親父が、どうして……。これから楽しい第二の人生を歩んでほしいと思っていたのに」という思いも湧き起ります。自分自身に対するもどかしさや、現状に対する戸惑いも手伝って、お兄さんへの不満がふくらんできたようでもありました。

不満



限られた 「親との時間」



現代の高齢者の生活は、年金制度や介護保険などによって、ある程度は社会からの援助を受けることができます。それでも看病や介護などの必要が生じたときは、多くの場合、子供をはじめとする家族の手助けが必要となります。

俊和さん一家のように、両親が二人とも病気になる場合や、兄弟姉妹が少ないために、夫婦それぞれの両親に対する配

慮が必要な場合もあるでしょう。また、近くに住んでいれば日常の手助けができて、俊和さんのお兄さんのように離れた場所で暮らしていれば、それも容易ではありません。そこには、それぞれの立場の悩みが生まれることでしよう。

「親孝行したいときには親はなし」という古言が生まれたのは、平均寿命が今よりもずっと短かったころのことです。しかし、長寿の時代を迎えた今でも、親を看取った後に「もつとよくしてあげられたらよかつた」という思いにさいなまれる人は、少なくありません。

成人した子が親と一緒に過ごせる時間は、意外に短いものです。例えば、独立した子が現在四十歳前後で、親から離れた場所に暮らしていただきます。親が六

十代後半だとすれば、現在の平均寿命で考えて、親の寿命はあと二十年。仮に、その親子が顔を合わせて一緒に過ごせる時間が一年間で十日ほど、一日につき九時間として計算すれば、二十年間では千八百時間、七十五日分ということになり

ます。この数字は、親子が住んでいる場所など、それぞれの家の事情で変わってきますが、「二十年間で七十五日」という数字にしてみると、かなり少ないと言えるのではないのでしょうか。



お母さんの悲しい顔



ある日曜日、離れて暮らしている俊和さんのお兄さんが、入院中のお父さんを見舞いました。その日は両親の体調もよく、病室を訪れたお兄さんと、和やかに話を弾ませています。

「遠いところ、いつも悪いねえ。仕事も忙しいんだろう？ あちらのご両親は、お元気かい？」

「まあ、おかげさまでなんとかやっていよ。それより、父さんと母さんのことは俊和に任せきりで……」

両親は元気そうなお兄さんの話しぶりにうれしそうですが、そこに居合わせた



俊和さんのいらだちは収まりません。「明日も早いんでしよう？」と、帰りの時間を心配するお母さんと一緒にお兄さんを見送った後、こんな言葉が口を衝いて出ました。

「兄さんはたまに来て、いい顔をするんだからなあ……」

そのつぶやきを耳にしたお母さんは、一瞬悲しそうな、情けないような表情を浮かべました。俊和さんは「しまった」と思いましたが、一度口から出た言葉は取り消せません。

気まずい雰囲気のままお母さんを実家へ送り届けた後、自宅へと向かう俊和さんの脳裏には、幼いころの記憶がよみがえってきました。

——遠くに住んでいた俊和さんの祖父

や祖母が病に倒れたとき、両親は何を差し置いても駆けつけたこと。祖父母が入院したときは、まだ小さかった俊和さんたち兄弟を置いては長く家を空けることができず、週末のたびにお母さんが新幹線に飛び乗り、祖父母と一緒に暮らしていた伯父さん一家と看病を交代しに行ったこと。その間は、お父さんが自分たち子供の面倒を見てくれたこと。日曜日の夜遅くに自宅へ戻ったお母さんは、翌朝にはいつもと変わらない笑顔で、家族を学校や会社へと送り出してくれていたこと——

「あのとき、親父やおふくろは大変な思いをしながらも、残り少ない親との時間を大切にしたいと願って、精いっぱい尽くしていたんだろうな……。向こうの伯

父さんや伯母さんほもつと大変だったろうに、自分たちが訪ねていくと、おじいさんやおばあさんと一緒になつて「しばらく見ない間に、大きくなつたねえ。遠いところ、よく来てくれたねえ」と言つて、喜んでくれていた”

また、幼いころの自分がお兄さんとけんかをしたときの、お母さんの悲しそうな表情も、思い出されるのでした。

”自分にも子供がいる。二人の子供のうち、どちらのほうが大切ということはない。その子供同士がけんかしているのを見ることは、親にとつて一番つらいことだろう。自分は今、両親をそんな悲しい気持ちにさせているんじゃないか”

俊和さんは、”両親や伯父さん、伯母さんが祖父母に尽くしたのと同じように、



自分もできる限りのことをしたい”と、あらためて考えました。そして”親孝行とはどうすることなのか”という点にも思いを致すのでした。

親の恩に 報いるために



「親孝行」と言うと、プレゼントをすること、食事や旅行に招待することなどを思いつく人も多いことでしょう。また、俊和さんが実践してきたように、老親の日常の手助けや、看病・介護などに尽くすことも、その一つです。

しかし、その基本としてまず考えなければならぬのは「親に安心していただく」ということです。

親にしてみれば、自分が生み育てた子供は、どんなに成長しても「わが子」です。たとえ社会的に自立し、経済的に豊かになっても、常に子供のことを心配し、気づかう存在なのです。そうした親の心を思い、まずは自分の体を大切にすること、また、兄弟姉妹が仲睦まじくすること、そして円満な家庭を築いていくことで、親の心にどれほど大きな安心と喜びが生まれることでしょうか。

また、愛情のこもった心からの感謝といたわりの言葉によって、安心と喜びが生まれることもあるでしょう。

「親父、ここまでよく頑張ってきたな。今、自分たちがこうして暮らしていけるのは、親父のおかげだ」

「お母さん、痛いかな。さすってあげよう」



か。自分も小さいとき、こうしてもらったのを覚えているよ」

「父さんはいつも、僕のためを思ってくれた。母さんは僕の帰りが遅いときも、ずっと待っていてくれた。その

心を心として、僕も今、子供と向き合うよ」

「お母さん、お父さん。いつも気持ちよく、おじいさんとおばあさんのお世話をしていたね。自分たちも同じように、お父さんとお母さんを大

切にします」

年老いた両親に対しては、これまで見てきた後ろ姿や、注いでもらった愛情の深さを思い、そんな敬愛の念を言葉に表してみるのもよいでしょう。

「安心」が育む豊かな人間関係

「相手に安心を」という心がけは、どんな人間関係においても大切です。

祖父母に尽くした両親たちの姿を思い出した俊和さんは、これまで自分の考えだけで行動しつつ、心の中ではお兄さんを責めてきたことに気づきました。離れて暮らしているお兄さんには、お兄さんなりの事情や思いがあり、そうした中でも両親のことを心配しているはずです。俊和さんは、そんなお兄さんを安心させるためにも、両親の状況をできるだけこまめに知らせようと考えました。思えばこれまででは忙しさやいらだちも手伝っ

て、つい、お兄さんからの電話にもそんなに応対おうたいをしてしまっていたような気がします。もっとよく話し合えば、俊和さん一人では考えつかなかった点に気づくかもしれません。また、兄弟が同じ心で尽くす姿を見たとき、両親はどんなに安心し、喜んでくれることでしょうか。

——兄さん、そちらは皆さんお変わりありませんか。この間は忙しい中、兄さんが訪ねてきてくれたことを、父さんも母さんもととても喜んでいました——

そんなメールを打ちながら、俊和さん自身も少しずつ変わってきています。